有島記念館と歩む会

土香る会

会報 3 号
平成 29（2017）年
3 月 31 日発行

TSUCHI-KAORU-KAI　NEWSLETTER　VOL.3　March 31th. 2017

■目次

□巻頭言：新しい農村、農業文化の出発点／土香る会会長　樫原和雄・・・・・・・・・・・・・2
□土の香りに寄せて：有島武郎の心中に関する情報共有とは／事務局　梅田滋・・・・・・・3
□活動報告と今後の予定（土香る会、有島記念館、有島謝恩会）・・・・・・・・・・・・・・・ 4
□会の運営を話し合う（役員会で決まったこと）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
□この人に聞く②：新企画カフェ土香る／菊地寛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
□交流広場：会員の想い、会員の声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
□有島作品に想うこと②：『カインの末裔』を読んで／春日井雅子・・・・・・・・・・・・・14
□有島に吹く風：木田金次郎美術館で思ったこと／土香る会副会長　菊地昌子・・・・・・・15
□編集後記ほか：・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

■巻頭言

新しい農村、農業文化の出発点

土香る会会長　樫原和雄

有島武郎が小作人七十戸、３３０haの農場解放を行い、狩太共生農団として地区の将来に夢を託したのが大正十一年、その翌年に波多野秋子との自殺で世を去ってから94年が経過した。

当時の狩太村は人口八千人余、農家戸数千戸、この一世紀に人口は半減し、農家戸数は十分の一に減少、有島地区も七十余が七戸に減少―この変化を有島は天上からどんな思いでみているのだろうか。

戦後の振興から成長バブル経済、地域の衰退が止まったまま、地球規模の危機のオンパレードの中で、時代の先行きがみえないなかで立ち止まって人生も地域も見直し、有島が農場解放に託した想いや理念を現代に移して再構成し、再出発する時のようである。

そのテーマは、地域衰退、変化の百年を清算して、再び地域ローカルの時代がやってきたのではないかという確認である。

そこで見えてくるのが、雄大な山岳景観や大地の自然資源を生かした地域農業や産業、町の魅力や個性を再構成する分岐点にあることではないだろうか。

自然に恵まれた大地の再耕作ーそれは規模の拡大による生産性の向上や経営の合理化による経済の向上ではない、新しい農業のあり方による自立した生活、地域経済づくり人の時代がやってきたようである。

小さな自給農業のあり方、ニセコならではの集約農業の志向。若者たちの田園回帰に向う農的暮らしの憧れ、半農半×による農的ライフスタイルの登場、農村リゾートに憧れる都市住民のコミュニティガーデンなどが、新しいローカル文化の姿として登場してきているように感じている。

有島に限定しても、かつての３３０haの農地のうち休耕や廃農地はどの位あるのだろうか、遊休地をフルに活用して、小さな新しい農業、半農半×農業から、ニセコならではのローカルコミュニティが形成され、地域全域に広がる可能性がみえている。

観光とは好奇心で人が集まる所、それに対してリゾートとは窮屈な都市を離れてホッと一休みできる所ーそこに新しい農が加わり、大地の中での相互扶助の助け合いが支えとなり新しい生活地域経済の姿が形づくられていくーそれが21世紀ニセコのテーマであり世界に認知されているニセコのこれからの課題ではなかろうか。

そのためには、よそもの視点で地域の魅力や特性を再点検することも大切である。次世代の若者、地域協力隊や田園回帰Ｉターンの連合で、新たな農村文化コミュニティの華を開花することも大切である。

有島が残した思想＋理念を現代に生かして、地域の大地に農業、農村の新たな種が播れ、芽を出し、花を咲かせることーそこに有島が残した文化遺産も新たな輝きを持ってくるのではないだろうか。

■土の香りに寄せて
有島武郎の心中に関する情報共有とは

昨年末に行われたある地域でのまちづくり懇談会において、参加住民の方から、「有島記念館で、有島武郎の心中に関する説明コーナーを見てショックを受けた方がいます。心に痛みを感じる人がいるので、「死亡」など、表現をやわらかくできませんか」とのご意見が出されました。

町及び記念館としての対応とは別に、土香る会としての考え方を整理する必要があるとの思いから、事務局は会員のみなさまにご意見をお願いしました。その結果寄せられたご意見を集約し、事務局の見解も加えて、ご報告とご提案を致します。

まず、(1) 有島記念館が現在行っている心中に関する説明は、文学館である有島記念館の社会的責務として最低限必須の内容であること、(2) 有島記念館は諸々の忖度からは独立した立場で使命を遂行する機関であること、(3) 情報共有をまちづくりの根本としているニセコ町としては、展示や印刷物の説明内容を現状よりあいまいにすることはまちづくりの基本原則に反する行為であること、等の観点から、展示内容の後退があってはならないというのが、ご意見を寄せられた会員10名のほぼ一致した見解でした。

その意見交換の中から、さらにもう一歩深い論点が見えてきました。

記念館が展示、説明すべき「事実」とは何か。「自殺？」「心中？」「どのような人との心中？」・・このどれも事実の表現には違いないけれど、記念館がすべき表現はどのレベルなのか、という問題です。

これについては、関係者の気持ちを察して最小限の情報だけに留めるのが「思いやり」ではないのか、というご意見がありました。これに対して、記念館の責務としてわかっている情報は公開すべきであり、それが、有島武郎の生き方や思想や芸術への敬意であり、本来の「思いやり」であろう、というご意見もみられました。

そのことで、悲しみ苦しんだ人がいたことは事実であっても、心中という辛い事実に接した多くの人が、武郎の様々な思いと考えを汲み取って自らに重ねて考えるのが、本来の「思いやり」ではないでしょうか。事実は可能な限りありのまま客観的に受け止め、そこから死を含めてトータルに武郎を考える姿勢をとりたい、というご意見が多くみられました。

このようなみなさまのご意見を受け止めて、土香る会としては、冒頭ご紹介した住民の方がこの主旨にご理解いただけることを願い、同時に、町や記念館に対しては、原則的にあるべき対応をお願いしたいと思います。

この議論を通じて、辛い、苛酷な、あるいは醜い実態から目を背け、蓋をするような表現になることがあってはならないと感じました。

美しい言葉の背後に潜む矛盾に満ちた現実を真正面から見詰め、真剣に悩み考える姿勢を貫いたのが、有島武郎でした。「弱さの中に、何時も理想を諦めたくないという強い意志を捨てられず苦しんだ有島」(ある会員のご意見から) を、見据えたいと思います。

(文責／事務局　梅田滋)

■活動報告と今後の予定

□土香る会の事業報告

（10月～3月）

●読書会

第1回（11月19日）　8名参加

テーマを「親子」ということで話を始めました。

皆さんの話をまとめますと、父親は息子に対してあまりしゃべらず結構厳しかったようですが、一方、娘に対しては、同じ親かと思うほど猫かわいがりをしていたという対比が面白く感じられました。

話は「親子」から何度もそれて行き、昔の生活ぶりや有島農場・有島地区をめぐる話題になったり、果ては武郎の唱えた「相互扶助」や有島の死についても出てきて、まとめようがありませんでしたが、何でも言える気軽さからか、参加してよかったという感想でまとまったように思いました。

こういうおしゃべり会もいいねという事で、第2回は翌月に決まりました。

課題図書は『小さき者へ』『小さき影』の2作です。

第2回（12月10日）　8名参加

2回目も前回と同じ「親子」をテーマにしました。違っているのは、前回が自分と親の関係だったのに対して、今回は自分と子どものことに力点を置いたことです。

人は孤独であり淋しい存在だ。親子といえども分かり合えないのではないか。いや、実は無意識界では繋がっている。魂は大昔から時や場所、対象を選ばず生まれ変わっている。過去の記憶を持って生まれてくる。・・・などの意見（考え）が出され、果ては、子どもは母親を選んで生まれてくるという考え（事実？）を聞くに至って、参加者の多数がまさかの共感を示したのには驚きました。

やがて話は武郎に戻っていき、妻がいても武郎は淋しかったのではないか、武郎は妻に対して壁を作っていて自分を本当に理解してくれているのかいぶかしく思っていたのでは、などの意見が出ました。そしてそれは次回の「夫と妻」というテーマで繋いでいこうということになりました。

課題図書は『An Incident』『死と其前後』『実験室』の3作になりました。

第3回（1月21日）　5名参加

3つの課題図書はどれも重い内容のもので、意見感想が出にくい雰囲気でした。出席が少なかったのも淋しかったように思います。

テーマの「夫婦」に関しては、死に際してどちらかが先に亡くなるのが普通ですが、課題作品の主人公（おそらく有島武郎）は妻の死を迎えて二人に通い合うものがあったのではとか、翻って自分は一人で死にたいとか、死んでからも家族に拘束されたくないなどの意見が出ました。

最後に梅田さんから3作品に関する「読書ノート」という感想文を読んでいただきましたが、どれも深い読みに基づいた論の展開があり、その場で簡単には意見を言えない気がして皆が黙ってしまったのが印象的でした。黙り込む読書会はとても新鮮で、内容やテーマを消化するのに時間がかかることもあると実感しました。

私としては今回の続きをもう一回やりたい気分でしたが、次回の予定が急に決まりましたので、希望は先送りです。

終わりがけに副会長の菊地昌子さんから提案があり、可能なら次回からは自分の感想をどんな形でもいいから文字にして持参することになりました。

3月11日に視察研修旅行として木田金次郎美術館に行くことが決まりましたので、それを受けて次回（2月）の課題図書は『生まれ出づる悩み』とし、できれば『「生まれ出づる悩み」と私』（木田金次郎著）も読むことにしました。

第４回（２月18日）　10名参加

仕事（絵描き）を取るか生活かで悩んでいた木田の姿に自分と重なるものを見た有島武郎は、それをテーマにこの作品を書いたと思われ、それは読書会でも共通した認識であったように思います。

文字通り「岩内が生んだ」画家木田金次郎にとって武郎との出会いは僥倖（ぎょうこう）でした。結果的に武郎の助言を守って木田が大成したからです。それについては、木田の感性や才能（まさに岩内の自然や人々が木田の持つ才能を育んだ事が小説から読み取れます）を見抜いた武郎がすごいとか、武郎には心の広さを感じるとか、結論（木田の悩みに対する助言めいたこと）を言わない武郎は正直で誠実な人柄ではないか、という発言がありました。

お互いの才能を高く評価していた二人でしたが、生活面では全く対照的でした。木田は、生活に追われながらも画に対する情熱を捨てられません。生活面で感じていた大きな負のベクトルを正のベクトルに転換して画にぶつけます。画に対するその荒々しい情熱を感じ取った武郎は木田に嫉妬します。自分には生活面での苦労がない分、（文筆活動に対する）情熱は木田に負けているのではないか。木田のようにストレートに作品に向かいたいけれどもそれが出来ないもどかしさが作品から伝わってくるようです。

多くの芸術家には様々な苦しみがあります。例えば、本当にやりたいことと生活していく（金を稼ぐ）ためにやっていることの不一致がそうです。木田にもそういうことがありました。

さらに別の苦悩もあります。絵描きなら「描きたい欲求」が一番にありますが、それが別の形で利用されてしまうことがないとも限りません。倶知安の画家小川原脩が従軍画家としての自分の経歴にどう責任を取るかで一生苦しんでいたことがその例でしょう。

描きたいものを描いているように見えても、画とはかけ離れたところでの悩みもあります。木田の場合もそういう時がありました。『生まれ出づる悩み』に登場したあと、自分の画の才能で名が売れているのか、小説のモデルとして一時的に話題になっているに過ぎないのか悩んでいたらしいのです。才能がある分、余計に苦しむことになるのでしょう。

いずれにしても、芸術家にとって、才能の有無に拘らず引き立ててくれる人や理解してくれる人がいるかいないかは一生を左右する大きなことだと思います。木田は周りからは変な目で見られましたが、理解のある家族や武郎がいました。自分の父親と武郎の死が何より辛かったと言っています。一番の理解者だと思っていたのでしょう。

一方、武郎は自分にはそういう人がいないと感じていたようにも思えます。ただ一人の例外は妻の安子でした。それは前回の読書会でも出た話題でした。妻を病気で亡くした後、武郎は羅針盤を失ったように一人で右往左往していたのかも知れません。

よく読まれている本だけに活発な意見交換となりました。５名（東京の浜田さんを含めて）の会員から提出いただきました感想文は既にメールでお届けしています。

※４月からも継続して毎月読書会を開くことになりました。

・日時　４月15日（土）午後２時
・場所　有島記念館ブックカフェ

（文責／事務局　井上剛）

●研修旅行

初めての視察研修旅行として３月11日に岩内町の木田金次郎美術館を訪ねました。前日まで３日間続いた雪模様とは打って変わった晴天の下、カモメも迎えてくれました。総勢７名ということもあってか岡部卓学芸員も力が

入ったらしく、写真を見せていただきながらの説明が30分延びて1時間半に。その後展示会場を見学しながら絵の解説をしていただいたのも予定をオーバーして1時間半に。有島記念館との繋がりもあって、岡部さんも気が楽だったのかもしれません。大変お世話をおかけしました。

いろいろ説明いただいた中で特に私が驚き、注目したのは次の3点です。

先ずは、二人（武郎と金次郎）の後姿が写った下の写真。武郎が岩内に行ったときのひとコマですが、日付が1922（大正11）年7月17日。なんとこの翌日に武郎はニセコで農場解放を宣言したのです。さらにこのときは武郎にとって最初で最後の岩内訪問だったそうです。それが何を意味するかすぐには思い至りませんでした。『生まれ出づる悩み』の新聞連載は大正7年に始まっています。ということはこの小説に出てくる岩内の自然や町並みや人々の様子は、岡部さんによると、全て想像の産物だそうです。

次です。金次郎は武郎をとても尊敬していましたし、特別な存在だと思っていたようです。その証拠が手紙です。武郎から金次郎に宛てた手紙が残っていますが、これは岩内の大火のずっと前に書かれたもの。大火のとき市街の8割、3千戸余が焼失したと記録にあります。金次郎の絵もそれまで描き溜めていたほとんどが焼失しました。大事なものだけを持って避難したはずですが、自分の絵ではなく武郎からの手紙を持っていったのでした。

そして人脈です。「孤高の画家」として通っている木田金次郎ですが、なんと人脈の豊かなこと！初めは武郎の人脈を通じて広がっていったのですが、武郎亡き後、数多の人が支援の手を次々と差し伸べてくれていました。メディアの人、経済界の人、画家を志す若手たち、建築家や民俗学者まで本当に様々なジャンルの人たちです。そういう人たちによって金次郎の情熱が伝えられ、受け継がれて今日の「絵のまち岩内」になっているように感じられました。

岡部さんの解説によって初めて知ったこともあり、行ってよかったと思えた研修旅行でした。事前に『生まれ出づる悩み』を読んで準備したからこそ得るものが大きい研修旅行になったと思いました

（文責／事務局　井上剛）

※左／有島武郎、右／木田金次郎
（大正11年7月17日）

●聞き書き

1月16日、事務局と葛西奈津子さんの3名で、有島地区の亀田万吉さんのお話をお聞きしました。

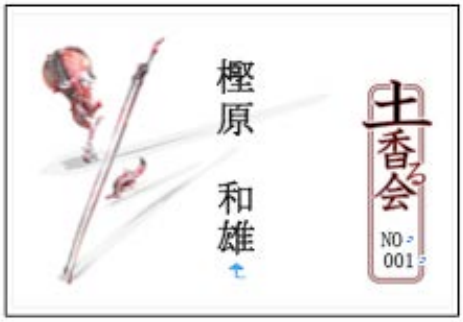
詳細は、記録がまとまりましたら、ご報告致します。

●会員証の発行

平成29年度の、新しい会員証を作成しました。会員証は、有島武郎の作品などをモチーフにしてデザインしています。

平成29年度は、『或る女』の一場面をもとにしています。どのような場面なのか、謎解きをお楽しみください。

毎年、新しい会員証を発行しますので、今後もお楽しみに。



□土香る会の行事予定（4月～9月）

○年次総会の開催

・予定は5月13日（土）

・それに先立って4月22日（土）に役員会を開く予定です。

○会員証の発行

・会員資格が1年間なので、毎年新たに会員証を発行します。（6頁参照）

○読書会の開催

・第5回は4月15日（土）

有島記念館ブックカフェにて

・課題図書は『一房の葡萄』（初めの5編）と『卑怯者』

○視察研修旅行

・第2回の訪問先は未定ですので、ご希望がありましたら、事務局にご連絡ください。

○記念館の行事に参加

・星座忌（6月22日）

○有島謝恩会の行事に参加

・有島灌漑溝の泥上げ（5月）と、草刈り（6月）

・弥照神社の秋祭り（9月）

○有島周辺の整備作業

・農場事務所跡、共同墓地、中谷宇吉郎宅跡地の草刈整備などを考えています。

・記念館周辺を、家族連れ、親子、観光客などが憩える場として整備再活用できないか話し合いをしたいと思います

○地域の記憶を聞き書きする

・有島地域をはじめ、ニセコで生きてきた先輩たちの話に耳を傾け、その記録を作成していきます。今年度も、有島農場地区の方々を中心にお話をお聞きする予定です。

○会員同士の交流を深める

・会員同士の交流を深めるイベントを構想中です。スタッフの間で、ユニークな案を話し合っています。

・企画の詳細は、10ページをご覧ください。

○有島記念館と土香る会の懇親

・有島記念館のスタッフと日程を調整中です。

□有島記念館の事業報告（10月～3月）

○企画展

・楽しい子どもの美術展（～10・10）

・大鉄道写真展（～10・10）

・「三浦綾子『母』と演出家守分寿男の仕事」展（1・28～10・9）

○ブックカフェ事業

・有島武郎童話の世界（北のやまねこ座＋侘び助、10・10）

・ムジークガルテン音楽教室（10・27、11・24、12・22、1・26）

○第28回有島武郎青少年公募絵画展

・公開（10・29～11・13）表彰式（11・5）

○普及事業

・西富遺跡見学会（11・3）

・朗読と音楽の調べ（三浦綾子『母』とカンテレの音色、2・26）

・映画「蟹工船」上映会（3・5）

・守分作品上映会「いのちの記憶・小林多喜二の生涯」（3・5）

・宮山登山会（3・11）

その他

・臨時休館（館内工事による、10・12～13）

□有島記念館の行事予定（4月～9月）

※未定です。随時ご案内します。

□有島謝恩会の事業紹介

有島謝恩会は、有島灌漑溝と弥照神社の維持管理活動を行っています。

○有島灌漑溝の泥上げと草刈り

有島武郎と吉川銀之丞が大正10年に造成した灌漑溝は、現在も現役で水田に用水を供給しています。その機能を維持するため、毎年、有島謝恩会は地域の人々にも参加を呼びかけ、延長4キロメートルを超える灌漑溝の全線で、5月に泥上げ、6月に草刈りを行っています。歴史の中で継続してきた営農施設管理作業ですが、農家の高齢化と後継者難による離農傾向が続き、農家だけでは維持が難しくなってきました。しかし近年は、有島地区の新住民にも参加する人が増え、また、地域外の有志による作業への参加も見られ、旧有島農場の原風景の維持にも結びついています。

○弥照神社のおまつり

有島武郎が大正11年に農場の無償解放を告げた弥照神社は、有島謝恩会が、春と秋に例大祭を行っています。また、元旦には、誰でも初詣ができるよう社殿を開放しています。例大祭の参拝や直会（なおらい）には、地域外からの参加も可能とのことです。有島農場を支えた地域の人々の名前が記された木札などが社殿内に掲示されており、地域にとっての歴史的な意義を再確認する機会として、大切にされている祭事です。

■会の運営を話し合う

□第2回役員会

平成28年度第2回役員会を9月10日に開き、次のことを決定しました。

（出席は、会長、副会長、理事、事務局の計7人）

・会員51名。さらに声かけを続けたい。

・有島記念館のイベントをメールでお知らせするようになった。

・読書会を月一回開催する提案があった。

・会員の交流を主にしたトークイベントを来年度開催する旨の新たな提案があった。

・会報第2号の企画案について協議し、了承した。

□第3回役員会

平成28年度第3回役員会を1月28日に開き、次のことを決定しました。

（出席は、会長、副会長、理事、事務局の計7人）

・会員は56名。目標の70には届かなかった。

・読書会が11月から毎月行われている。資料のコピー代は毎回一人百円を支払い、超過分は記念館に負担していただく。

・視察研修旅行を3月11日に行う。訪問先は岩内町の木田金次郎美術館で、岡部学芸員からお話をしていただく。

・町内の歴史資料収集の一環として、有島在住の亀田満吉さんから聞き書きをした。（1・16）

・有島謝恩会との交流として、弥照神社秋祭りに4名が参加。（9・22）

・会報第3号の企画案について協議し、了承した。

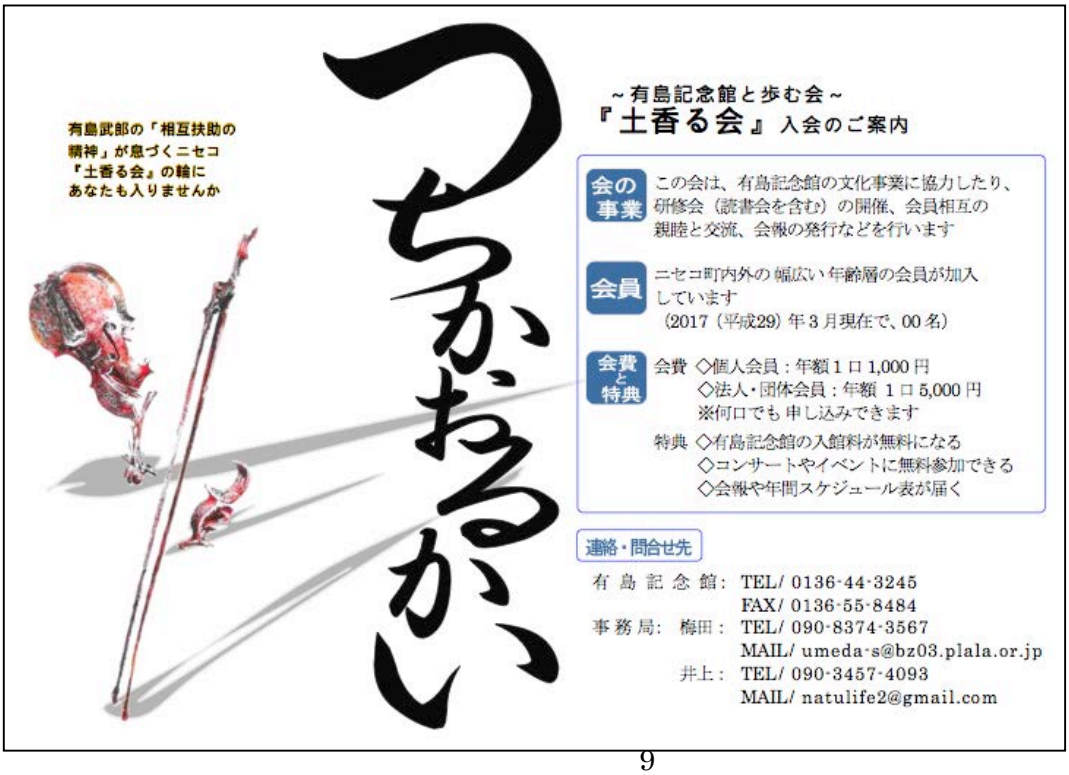
・有島武郎の最後に関する展示方法について会員間でメール交換が活発に行われたことを受けて、会の立場を会報で表明することになった。

・来年度からラジオニセコで土香る会の番組を持つことについて提案があり、話し合った結果了承された。

・記念館内に土香る会のPRスペースをいただけることになった。併せて、JR駅と道の駅に、記念館をPRする掲示物を置いてはどうかと提案があり、前向きに検討することになった。

・来年度の年次総会は5・13、役員会は4・22を予定している。

・来年度の会員証のデザインは「ヴァイオリン」に決まりました。会員の皆さんには、準備が出来次第お届けします。お楽しみに。



■この人に聞く②

新企画／カフェ土香る
―創造と語らいの小宇宙を

菊地　寛

真冬の有島記念館アートホールに、有島武郎の世界と様々な「縁」でつながる、あるいは感じたりしている土香る会の皆さんによって、多彩なジャンルの作品作りとそれをめぐる語り合いの「とき（小宇宙）」を創造してはいかがでしょうか。「カフェ土香る」企画です。

２０１７年度の総会に提案し、議論を深め、実施計画を進めたいと、役員会・事務局の段階で意見が交わされています。

言うまでもありませんが、私たち会員と有島記念館とは、濃淡がありながらもいろいろな縁があります。曰く、地縁、住縁、血縁、メモリアル縁、文縁、知縁、智恵縁、物語縁、電網縁、いやまだまだありそうです。

このような関わりの中から重なるキーワードを見つけて、双方向の糸口にし、「新たな空間・場」を創りだしてみたい、という議論からのアイデアです。

□Ｃｈｉ・ありしま

Ｅｎｎ・アリシマ

こんな抽象的なキーワードからプランを練ってみますと、コミュニケーションから生まれてくる創造のひろばでしょうか。講演会や講義のカタチをこえる、参加される方々の自由な語り合いからストーリーが誕生し、プロットが織りあがってゆく、その過程もまたよし、との方向が見えてきました。

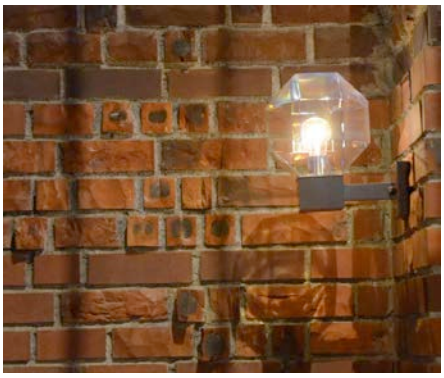
具体化しますと、例えば、

①有島今昔千夜一夜―ルポルタージュ作家による表裏話。

②私の好きな有島作品の一節―メドレーによる構成と朗読。

③ありしま縁からの発想―ショートドラマ実作とミニ公演。

などなど。これらは、おおむね15分から20分程度の表現タイムと、引き続いてのテーブルを巡るコーヒータイム（60分）で組み立てます。参加する皆さんによる時間と空間に「短編と語らいの素敵な小宇宙」を創ってゆきましょう、という雰囲気です。



□発掘！創作物語り、へ

こうした積み重ねの中から、次世代へつないでゆこうとの想いも芽生えています。ニセコを舞台にしての「現代口承文芸」「創作短編ドラマ企画」を公募し、出し物制作へとつなぎ、作品として記録性を持たせてゆこうという考えです。

名付けて「発掘！創作物語り」といった趣でしょうか。

□第１回は１８年２月目標に

夏～冬の準備期間も楽しく

開催時期は、有島記念館が比較的静かな厳冬期に、場所は記念館アートホール（ブックカフェ）のスペースを想定。第１回は２０１８年２月の土曜日の午後帯90分。

開催は、準備もまた楽しく、と、おおむね２年程度の間隔を置きながらのビエンナーレふうに。参加者は10人（＋－５人程度）を想定。息長く続けてゆければいいかなとの素案になりそうです。

第１回の出し物は本会事務局長の梅田滋さんがルポ作家として発掘中のニセコ・有島に関わるルポルタージュ作品を想定。その一部を写真（パワーポイント投影）とお話で紹介していただきたく、ご準備をお願いしています。

こうした内容を、２０１７年度春の総会にてお諮りします。

交流広場
会員の想い、会員の声

故郷の想い出
有島に出逢うまで

吉川　洋子

会津盆地の南のへりにある村が私の故郷です。そこから、人を拒むような南会津の深い山並みが連なる、麓で生まれました。

生家は明治維新のゴタゴタで没落した庄屋でした。私が生まれた頃は、もとの屋敷跡は畑になっていて、そこから四軒ほど南に入った古い農家に住んでいました。その家は、会津の典型的な農家の造りで、中心に囲炉裏があり、大きな大黒柱が黒々と鈍い光をはなっていました。

家のある通りにそって、小さな川が流れていて、沢ガニやヤゴを捕まえたり、釣りをしたりして遊びました。

川に沿って大きなケヤキの並木が続いており、いつも、川の流れる音と、さわさわとケヤキの葉が風にゆれる音が聞こえていました。夜になると、フクロウの声や、ムササビの声と樹間を飛び移る音もしていました。

その頃は、まわりの自然のなかに、昔話に出てくる神様や魔物を、身近に感じていたように思います。

小学校に上がる前の年の東京オリンピックまで、テレビはありませんでした。母や祖母、泊まりに来た伯母たちが、寝る前に語ってくれる昔話を、本当に楽しみにしていました。その時のわくわく、どきどきと、お話しのイメージを、今も鮮明に覚えています。

そんな暮らしのなかで、小学校に入学する前は、青い目をしたセルロイドの人形と、数冊の絵本、童謡のソノシートが宝物でした。大好きな遊びが、人形に絵本を読んであげることで、飽きもせずに、同じ絵本を繰り返し楽しんでいました。

小学校の低学年の頃は、いつも窓の外の校庭とその先にある桑畑、山々や空を、飽きもせずに眺めて、ぼ～としていました。

四年生になると、学校の図書室にある、「怪盗ルパン」シリーズが大好きになっていました。ルパンになりきって様々な冒険をしました。一冊読み終わると、くたくたになってしまうほどで、本を読むというよりは「主人公の人生を生きている」ことに近かったと思います。その後の小学生時代は、本好きの同級生と競い合って、図書室にある本を読んでいました。お小遣いでマンガ雑誌も購入し、数人の友人で回し読みもしていました。今でもマンガは好きです。

中学生になるころから、トルストイ、太宰、井上靖、ヘッセ、夏目漱石、司馬遼太郎などが好きで、やはり、主人公の人生を追体験していたように思います。

そして、高校の日本史の授業で、有島の農場解放のことを知りました。いたく感動した私は、帰りに本屋さんで、有島の作品をさがしました。文庫本が何冊か置いてあり、題名にひかれて選んだのが、『惜しみなく愛は奪う』でした。何も知らずに購入したその評論集は、高校生の私には難しくて歯が立たず、撃沈した苦い想い出があります。

けれど、人物紹介の写真や解説文を読むうちに、有島の理想と苦悩が私の中に染み入ってきました。当時、薩摩出身の特権階級に属しながら、「農場解放」の理想を実行に移すことは、社会全体を敵に回すに等しい行為だったと思いますし、理解者もなく、孤独だったと思われました。その夜、感動と切なさで心がふるえ、眠れなかったことを思い出します。

それから四半世紀たって、ニセコに越してきた私は、町を知ろうとドライブに出て、「有島記念館」に立ち寄りました。足を踏み入れてすぐに気づきました。「有島記念館」とは、「有島武郎

の記念館」だったのです。
素晴らしい偶然に感謝！

有島武郎の心中

浜田和子

若かりし頃、就職試験の面接で「有島は三人の子を残して人妻と心中したのは無責任ではないですか」と問われ、思わぬ問いにむきになって弁護しました。これだけが理由ではないと思いますが、採用されませんでした。後年、結婚して我が子を抱いてみると、亡き妻に託された子達を残して心中するなど、誠に無責任と思わざるをえませんでした。

何故、彼は心中せざるをえなかったのか？二つの要因があると思われます。どちらか一つだけだったら、死なずに済んだでしょう。一つは性格。もう一つは相手が人妻だった事。

有島が心中した相手は波多野秋子という婦人公論の記者でした。有島は心中する七年前に妻を結核で亡くしています。嵐山光三郎は有島を文壇一の美男子だと言っています。お坊ちゃんで、教養があり優しい有島は女性に人気があって、妻亡き後、多くの女性に言い寄られても、縁談にも見向きもしませんでした。彼には倫理的に潔癖なところがあり、妻安子と婚約した時、安子に対して、全く清らかな思いで接する事ができるのに魂の救われる思いを抱いています。波多野秋子が有島に近付いて来た時、最初、有島は逃げています。友達にも、つきまとってきて嫌だ、恐怖感を覚えると言っています。どうにも抜き差しならない関係になってからも、もし彼女と結婚しても、きっと倦怠すると思うよ。そう考えられる女だよと言っています。心中と一口に言いますが、有島は秋子と初めて関係を持ってから、僅か四日後に心中しているのです。ここが有島たる所以です。

当時（大正十二年）日本には、まだ姦通罪があり、明治四十五年に北原白秋は姦通罪で投獄されています。出獄後、白秋は相手の女性と結婚しますが、後に離婚しています。姦通罪は夫の告訴がないと成立しません。

秋子については、色々と言われていますが、私が彼女をいやだと思うのは、唯一点です。翌日、彼女は夫に責められて全てを自白してしまいます。愛しているなら、自分の全てを引き換えにしても相手を守るべきです。

夫の春房は有島に一万円のお金を要求します。有島は自分の恋人を金に換える事は出来ないと拒否します。そして甘んじて監獄に行くと言っています。当時、三男は九歳、十二歳だった長男の森雅之は、後々までも父親に対して強い愛憎を抱いています。まだ、有島の母親も健在でした。

相手の女性の夫の性格は、この場合、大きな問題です。春房は「お金を出せば直ぐ離婚する。但し一度だけ払えば、それでいいと思うな。終生、お前を苦しめてやる」と言ったそうです。有島は春房に良い感情を持てなかったようで、お金を取って謝らせてから発表するような事もしそうな男だと危惧もしました。

そして、心中に走った重要な理由の一つは、日頃から、秋子が自殺願望の強い女性だった事です。心中も秋子から誘っています。有島の性格からして、自分一人、逃げる事は出来なかったでしょう。

白秋が姦通罪で投獄されたのは二十八歳、独身で、まだ、それ程の名声もありません。片や、有島は地位も名誉もあり、守るべき子供達が三人もいる四十五歳。

秋子が全て白状してしまった以上、采は有島に委ねられてしまっています。これ迄の有島の人生で他人から恫喝された事もなかったであろうし、女に取り

すがられて泣かれた事もなかったでしょう。「火事場の馬鹿力」と「火事場で腰が抜ける」という事もあります。

以前、私は、どうしたら有島を助けられただろうか、又は、客観的に見て、どうしたら一番上手に収められるか、という事を考えてみた事があります。先ず、一万円を払います。そして、春房にこう言います。「望む通りに一万円を払うから、秋子と離婚してほしい。私は貴方の名誉の為に、三年間は秋子と結婚や同棲はしない。けれど、もし貴方が以後、告訴をしたり、付きまとったりしたら、小説家の性（さが）として、貴重な体験を書かないでは、いられないだろう」と。三年間という歳月は春房の為ではあるけれど、この約束は追いすがる秋子への歯止めにもなるし、秋子とのこれからを見極めるのにも良い時間になると思います。これが、第三者として見て、ベストだと思います。でも、「するか・出来るか」は別問題。何とかして助けたいという思いで、あれこれ考えましたが、私は、ああいう最後を選び取ってしまう有島の不器用さが好きなのかもしれません。

書くことの重み

坪田世梨香

書くという行為のどのあたりから、人は物を書くための心構えを行うのだろうか。例えそれが記した者だけが触れることのできる私的なものであっても、保存可能な媒体に綴る時点で誰かに読まれる可能性を孕んでいる。ペンを握った者はいつだって、いつか現れるであろう読者の存在を意識せずにはいられない。誰かに読まれることを意識した途端、文は伝えるために適切な文体へと形を変え、物語ができあがる。

誰かに読まれようと望んで進んでペンを握る者もいる。小説で、評論で、様々な形式を用い第三者に自分の思いを伝えるための手段として彼らは進んでペンを取る。それが作家なのだろう。私の勝手な意見だが、有島武郎はページをめくる読者を強く意識してペンを動かした作家に思えてならない。思想家でもあった彼の、世間を改善し揺り動かしたい思いは作品に滲み出ている。その有島が読者を気にかけることなしに物語を書こうとするだろうか。

北海道新聞社の主催する有島青少年文芸賞に初めて応募してから、かれこれもう十年以上が過ぎた。私はこのことがきっかけで有島武郎を知ることになったのだが、まさかこうも長い付き合いになるとは思わなかった。

中学から高校まで、物語のようなよくわからない文章を書いて毎年一度応募した。私は書くという行為にそれほど意味を見いだせず、熱も入らず、物を書く喜びよりも義務としての苦痛の方が上回っていたように思う。応募にあたって有島の作品をいくつか読んだが、その時はただ素通りするだけだった。当時の応募作品作りにわずかでも役立ったと思いたいが、どうであろうか。

ひょんな縁で知り合った有島青少年文芸賞の受賞者にはかわいがってもらった。私も含め知り合った人々は文学の道へは進まなかったが、書くということに対して皆真摯だった。彼らも私も若かったが、彼らは誰かに読まれることを意識して作品を仕上げていただろう。書くことで得られる自分なりの意味も。私はただ、書かなくてはいけないので書いていた。私の書いたものを読んでくれる誰かなどどうでもよかった。

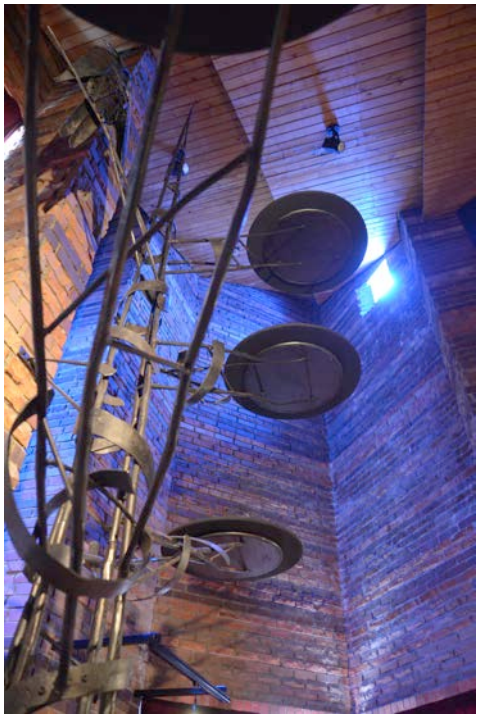
それしか術を知らないように大学では日本文学を専攻し、有島武郎を研究テーマに選択した。決して真面目な学生ではなかったために、ゼミの場でしばし突

飛な論を展開し周囲を困惑させたが、笑って済ませることなく付き合ってくれたことに感謝している。何十年と続いてきた研究の土壌で青いひよっこが騒ぎ立てても、柔軟に受け入れてくれた姿勢が有り難かった。

文芸の場や大学で、有島を介して私は多くの人々と知り合うことができたが、時が経てば経つほど不思議に思う。年齢も国も価値観も異なる人々と有島を通じて知り合い、己の創作のことや有島の作品研究について話し合った。当時はそれが当たり前だったので疑問を抱かなかったが、明治大正期の作家、それも有島が現代にいまだ大きな影響を及ぼしているのは驚くべきことなのだろう。

有島は晩年、作品発表の場を個人誌『泉』に絞った。有島の作品を真に望む読者のために発表の場を狭め執筆に専念したが、果たして彼の作品は彼の望む読者に読まれたことだろうか。軽く目を留めただけの有象無象の誰かではなく、有島の作品を心から希求する読者。わずかな活動期間のなかで少しでも有島の試みが実ったことを願うばかりではあるが。

未完で終わった『星座』を前にすると、有島が活動の場を絞ってまで描きたかったこととは何であったのかと、考えずにはいられない。



■有島作品に想うこと②「カインの末裔」を読んで

春日井　雅子

今まで、有島武郎の本をちゃんと読んでいなかったのですが、4年前、有島記念館で、「有島武郎ニセコ三部作」という文庫本を出版するにあたり、「カインの末裔」をあらためて読んでみました。以前読んだときはあまりにも暗いお話で、途中で（短編なのに）挫折してしまい、内容は全然覚えていませんでした。

あらためて読んでみた感想は、やはり「暗い」とともに「やりきれない」というもので読み進めているうちに、筋を追うことよりも文中のこの場所は、今ニセコの何処になるのだろうと思っていました。

私にとって「有島武郎」の作品を楽しんで読むことはとても難しいことだと、感想を書いてみて、あらためて実感しました。

この感想を書いているときに、高校卒業後、札幌の学校に進学した私に、父が言った言葉を思いだしました。「なぜ、有島文学を専攻しなかったんだ」と。私が進学した学校には山田昭夫先生が在籍していました。

有島武郎という人物にも作品にも、それほど興味がなかった私はニセコになぜ有島記念館があるのかもよくわからず、小学生が遠足に行くところという程度の認識しかなかったのです。

「土香る会」に参加するようになって、ニセコ生まれの私が有島武郎について、何も知らないということがよくわかり、これまでのことを反省しています。

最後に、「カインの末裔」の感想を書くつもりが、私自身の有島武郎に対す認識不足の反省となってしまったことをお詫びします。

※『カインの末裔』は有島記念館文庫1有島武郎ニセコ三部作所収

■有島に吹く風
木田金次郎美術館で思ったこと

土香る会副会長　菊地昌子

久しぶりに、木田金次郎美術館を訪れて、いろいろな方の手に彼の画がわたっていたことがわかり、丁寧な解説もして頂き、ゆっくり鑑賞できました。

しかし、私の頭を去来するのは、(有島が見たのは全く初期の作であり、しかし木田の何が有島を捉えたのか？生まれ出ようとする木田の中に芽吹くものを感じての)「生まれ出づる悩み」ではなかったか。

東京日日新聞に連載され始めたことに、木田は「自分などには理解に及ばない高尚な観念があるのだろう」ーと齊藤武一氏の文。

本棚にいつか道立近代美術館を見学したときに買った文庫本があった。佐藤友哉著「木田金次郎ー生まれ出づる悩み」。この際開いてみて、二十九枚の木田の画の色彩写真が、又十九枚の白黒のスケッチと思われる写真が五十八頁にわたって縮小されて掲載され、道新が出していたことに驚きながら、ゆっくり眺めることにしました。

このたび二〇〇八年に出版されていた「木田金次郎とともにー木田文子遺稿集」を買って来ました。そのうちにゆっくり読もうと思いながらまだ開いていないー

今、私の胸につかえているのは、有島の農場解放の思いは、かなりの年月を経て芽ぐみ育ったいきさつを通してのことと想像されて、その大正時代の自由思想かキリスト教の影響なのかを知りたいと思っているところです。

※　3月11日、岩内町の木田金次郎美術館へ視察研修旅行に参加して

■会員へのお知らせ

●会員募集のお誘い

会の自主事業の財源を、会員のみなさんの会費で賄うために、会員70名を目指しています。現時点での会員数は、56名となっています。

周りの方に、この会報を手渡して、会員になって一緒に活動するよう、お誘いください。

●プロジェクトスタッフ募集

編集部は、現在3名で運営しています。今回の第3号は、うち2名（梅田滋、井上剛）の責任編集です。

希望者のスタッフ入りを歓迎致します。また、読書会や研修旅行、交流イベント等、多様なプロジェクトがあります（4～7ページ参照）ので、スタッフになっていただける方は、事務局にご連絡ください。

（0136ー44ー3245
有島記念館気付）

編集後記

ある団体で長年ボランティア世話役をした人が、替わって欲しいと言いました。話し合いで2年ずつ順に世話役をすると決定▼最初の当番がなぜか3年やったその終わり頃、会議で次の当番が「私には今の当番のようなきちんとした仕事は出来ない。今の人にずっとしてほしい」と提案。続々と賛成票。当番逃れを隠すためか、「皆で金を出しあって当番の手間賃に」と言い出す始末。その時次の当番だった人の一言が「協力は惜しまない」。次の当番を引き受ける事こそが協力なのでは？▼人は自分の利益の為に、様々な意味を込めて言葉を使います。本来の意味で使った言葉でも、誰が言ったかによって微妙なニュアンスを生み出すことがあります。言葉の選び方は難しいと感じる場面が増えました。

（井上剛）

二〇一七年三月三十一日発行
発行　土香る会（有島記念館内）
〒048ー1535
ニセコ町字有島57
0136ー44ー3245
arishima@town.niseko.lg.jp

あなたは
どこにいきたいの？